



小長曾陶器窯跡

瓶子陶器窯跡

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 **せと 歴史と文化財を知る見学会** 「桂蔵窯跡の発掘現場を見に行こう」

主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団

日時：令和3年3月21日(日)

予定時間 ①午前 10時00分～
10時50分～

②午後 1時00分～ 桂蔵窯跡の調査成果(講義)
1時40分～ 出土遺物の見学

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳(西本地町2丁目)

宮地古墳群(上之山町2丁目)

広久手30号窯跡
木造十一面観音菩薩立像(下半田川町) 県
木造阿弥陀如来立像(下半田川町) 県

古瀬戸瓶子(寺本町)

陶製狛犬(深川町) 国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町) 国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝(塩草町)

定光寺本堂(定光寺町) 国
織田信長制札(窯町)
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(尻山町) 国
源敬公廟(定光寺町) 国
笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)
石造地藏菩薩立像(片草町)

陶質十六羅漢塑像(寺本町)
六角陶碑(藤四郎町)
旧山繁商店(仲切町・深川町) 国登
瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町) 国登
陶製梵鐘(深川町)

やきもの生産の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

古墳	5世紀	須恵器
	6世紀	
飛鳥	7世紀	須恵器
	8世紀	
奈良	9世紀	灰釉陶器
	10世紀	
平安	11世紀	山茶碗
	12世紀	
鎌倉	13世紀	古瀬戸
	14世紀	
南北朝	15世紀	大窯製品
	16世紀	
戦国	17世紀	連房製品
	18世紀	
安土・桃山	19世紀	桂蔵窯 操業
	20世紀	
江戸	19世紀	勇右衛門窯 操業
	20世紀	
近代	(明治)	瀬戸電之図の頃
	(大正)	
	(昭和)	

瀬戸市内の窯業遺跡

1000年以上のやきものづくりの歴史を持つ瀬戸市では、これまで800か所以上の「窯跡」が確認されています。窯跡とは、それぞれの時代においてやきものを焼いた、いわゆる「やきもの工場」跡のことを指し、時代によってその姿は変わっていきます。

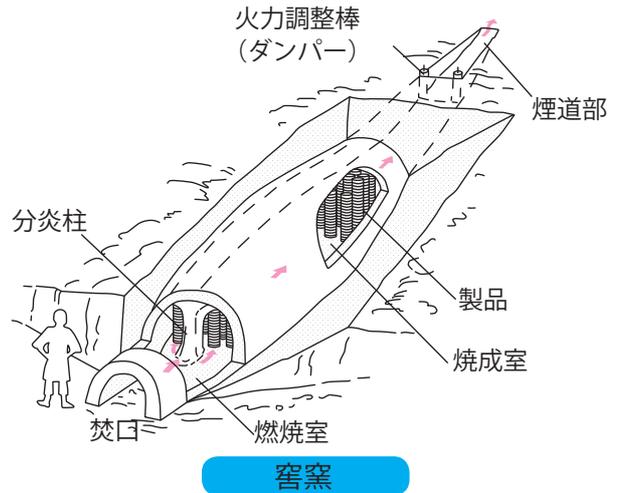
当然、製品を入れて焼く「窯体（ようたい）」も、その構造は変化していきますが、瀬戸窯で最初に使われていたのが「窖窯（あながま）」と呼ばれる構造の窯体です。これは丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いた地下式、もしくは半地下式の単純な構造のもので、手前から燃料である薪をくべる「焚口」、薪を燃やす「燃烧室」、製品を置いて焼く「焼成室」、煙突にあたる「煙道部」に分かれています。この構造の窯体は市内で約500基と、最も多く確認されており、そのほとんどが標高の高い丘陵地に構築される傾向があります。

戦国期を迎える15世紀後期には、「大窯（おおがま）」と呼ばれる窯体が登場します。大窯は窖窯とは異なり集落周辺の低位丘陵に構築されるようになります。この窯は地上式の構造であったため、天井を高く架けることが可能で、窯の容積とそれに伴う生産量が飛躍的に増加したと言われています。また、天井を支えるための天井支柱が新たに設けられるとともに、大きくなった窯内の熱効率を高くするため分炎柱左右に障壁を垂れ下げ、燃烧室の床面に小分炎柱と昇炎壁を設けて窯内の燃烧ガスの圧力を高める工夫がなされました。

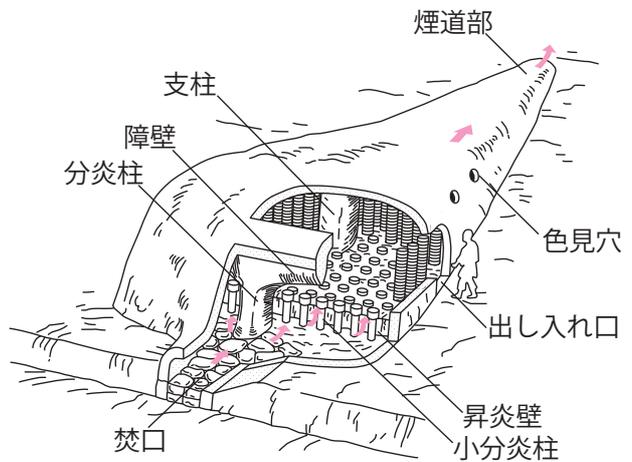
江戸時代になると、「連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）」が登場します。他の窯に比べて容積の小さい焼成室（房）が、階段状にいくつも連なったその窯は長大で、一度の生産量はさらに増大しました。しかしながら一つ一つの焼成室の容積は大窯に比べて小さいうえに、下の房からの廃熱がそのまま上の房でも利用されるため、熱効

率に非常に優れた窯体だったといえます。この窯も大窯同様、江戸時代の集落周辺の丘陵地に集中して構築されました。

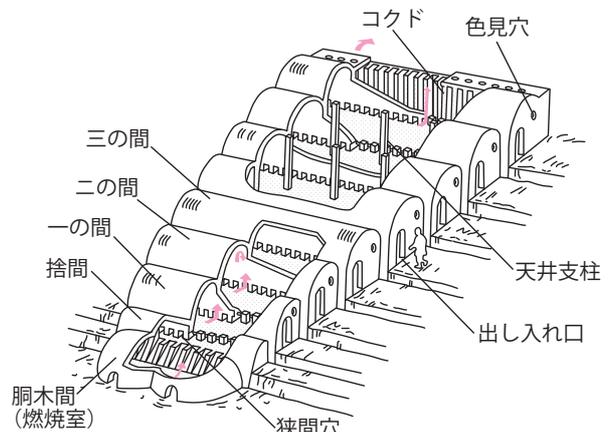
窯体模式図



窖窯



大窯



連房式登窯

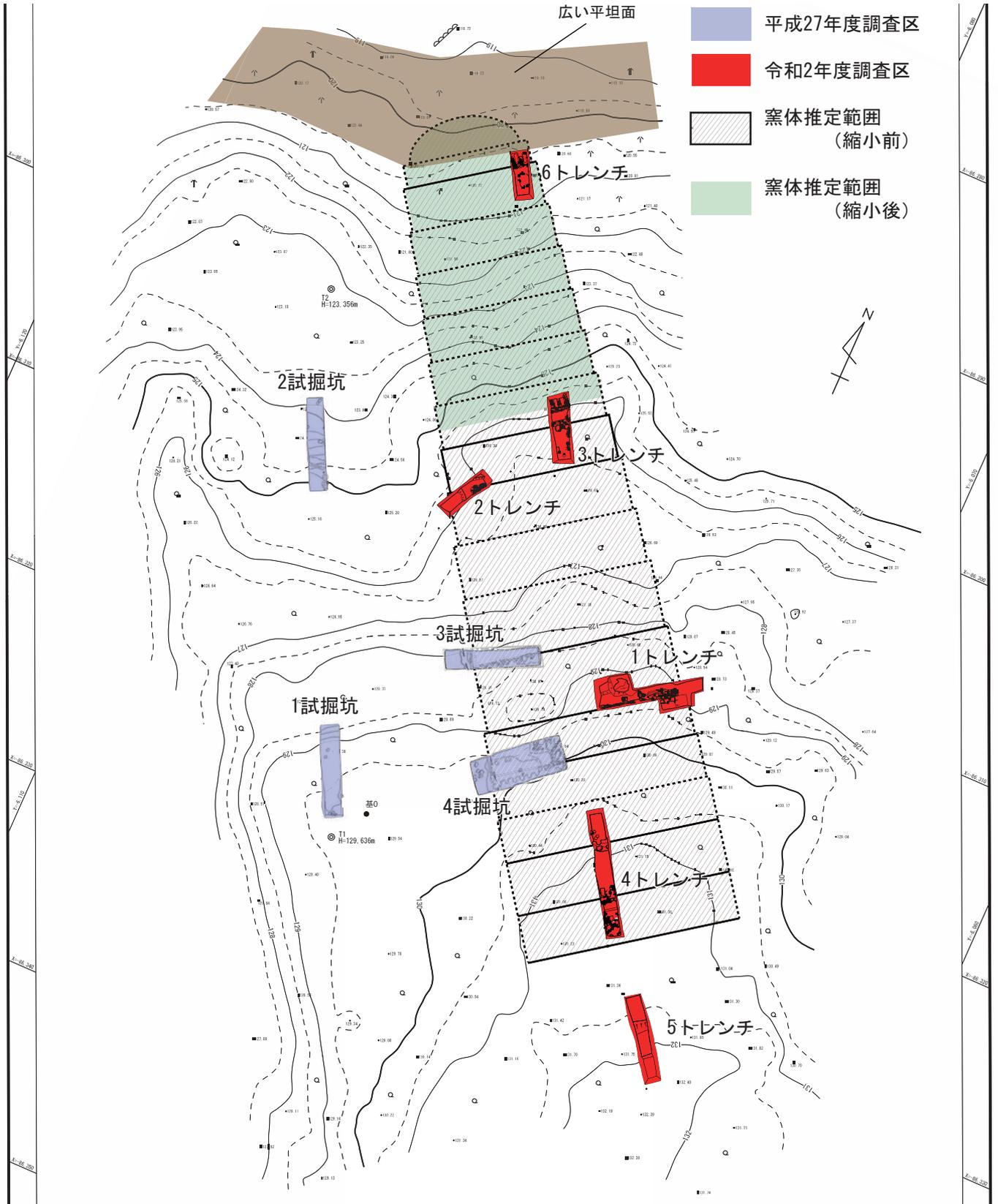
「桂蔵窯跡」と「瀬戸窯跡」

今回、調査を行った「桂蔵窯跡」は、江戸時代後期にやきものづくりを行った連房式登窯で、瀬戸市西茨町地内に立地しています。これは江戸時代において瀬戸村の村域にあたり、さらに村内の中央を流れる瀬戸川の南側、「南新谷（みなみしんがい）」の一角に位置しています。これまで、同じ南新谷における江戸時代の窯跡では、桂蔵窯跡から西に約 100m の地点に存在した「勇右衛門窯跡」で発掘調査が行われ、比較的遺存状況の良好な連房式登窯が確認されましたが、道路建設に伴う工事によって滅失してしまっています。このように、瀬戸窯における江戸時代の連房式登窯は、集落周辺の丘陵地に構築されていたことから、現在までの市街地化によって、ほとんどが削平されてしまい、比較的保存状態が良好な窯跡は、洞地区の「洞窯跡」・「東洞 A 窯跡」、陶祖公園内にある「夕日 4 号窯跡」など、非常に少ないのが現状です。

現在、瀬戸市では「瀬戸窯跡」として、赤津の小長曾陶器窯跡（室町・江戸時代稼働、窖窯）と、同じく赤津の瓶子窯跡（江戸時代稼働、連房式登窯・大窯）の 2 つの窯跡が国指定史跡となっており、これらに加えてさらに国史跡として追加指定し得る候補を抽出しているところです。本窯跡は平成 27 年度に第 1 次調査が行われており、その際には連房式登窯が良好な状態で遺存していることが確認されました。そういった意味では、残された数少ない連房式登窯であることや中心市街地にあるという立地性から、本窯跡がその候補となるのは必然と考えられます。今回の調査は、前回の結果を踏まえて、窯体の規模（全長・幅）を明らかにすることを最大の目的として行い、大きな成果を得ることができました。今回の「せと歴」はその成果をご覧ください。開催するものです。

桂蔵窯跡の調査

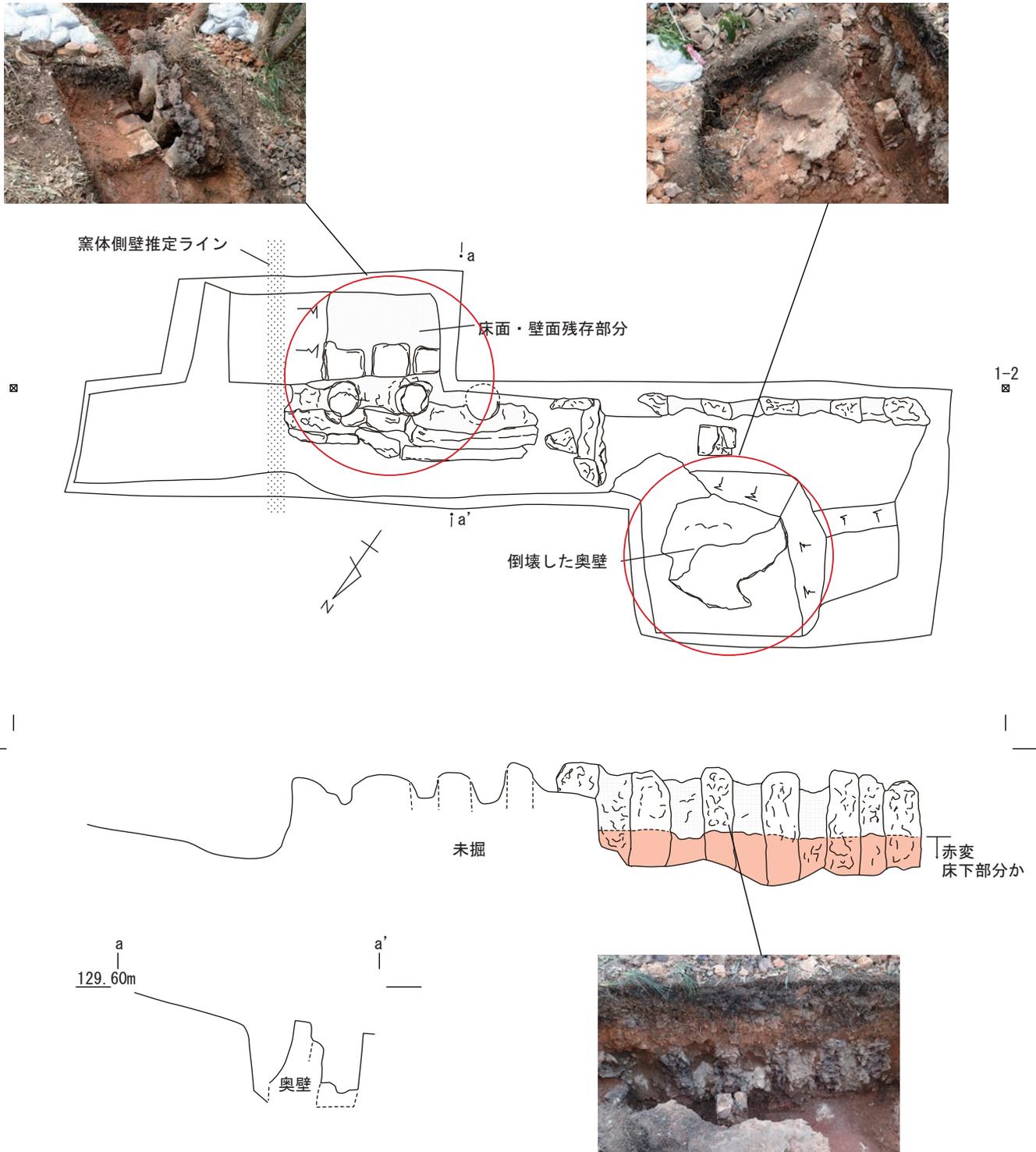
平成27年度調査では4か所の調査区（試掘坑）を設定して窯体の有無確認を行い、続く令和2年度の調査では6か所の調査区（トレンチ）を設定して確認調査を行いました。その位置関係は下図のようになります。ここでは令和2年度の各トレンチの状況について説明します。



令和2年度 桂蔵窯跡範囲確認調査トレンチ配置図

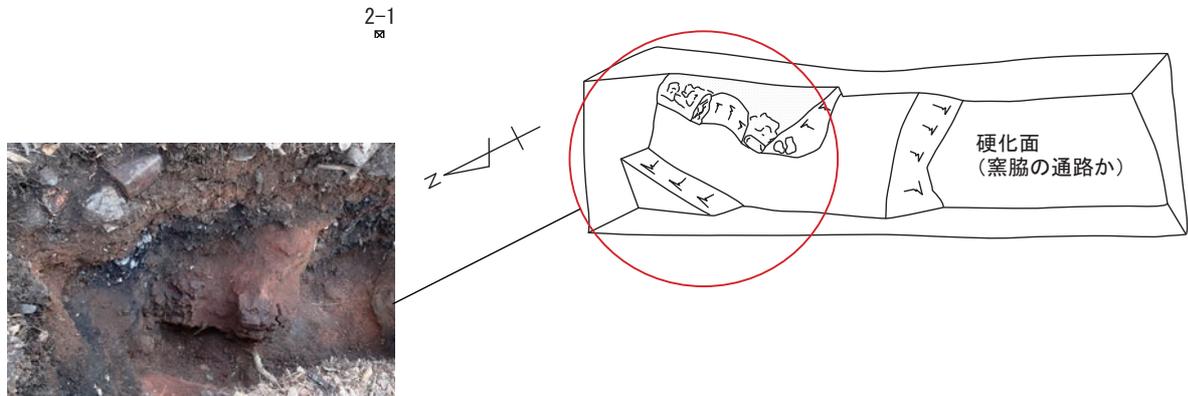
1 トレンチ

平成 27 年度の調査では、窯体の西側の側壁は確認されましたが（3 試掘坑・4 試掘坑）東側の側壁については不明で、そのためこの窯の最大幅が不明でした。その東側の壁を確認するために設定したトレンチです。結果的に焼成室と焼成室の間に設置された炎の通り道である「狭間穴（さまあな）」と房の床面が検出され、さらに奥壁も一部残存していることが明らかになりました。東側の側壁の痕跡は見つかりませんでした。床面が途切れる辺りがそれにあたると思われます（下図、「窯体側壁推定ライン」）。



2 トレンチ

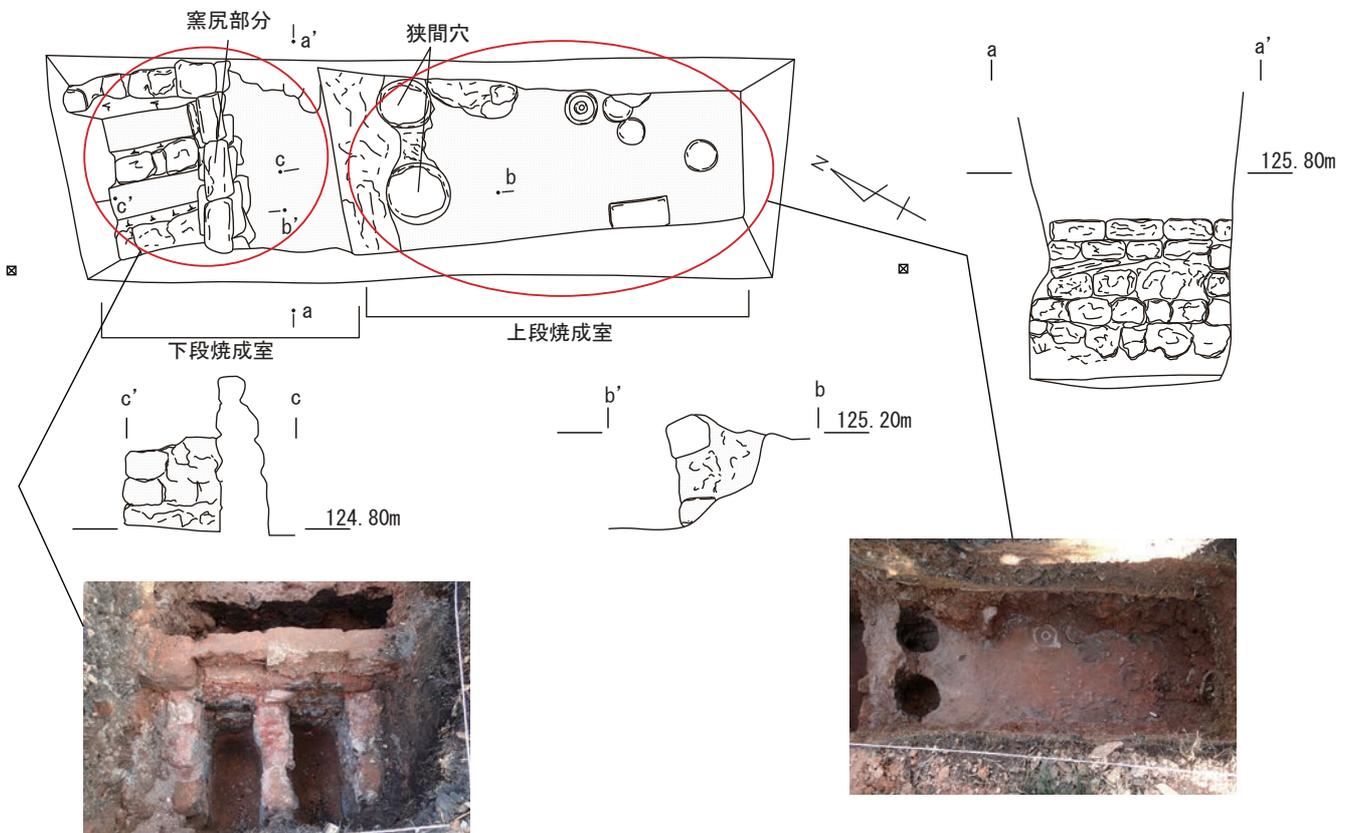
西側の側壁の位置を再度確認するために設定したトレンチです。結果的に側壁は残っていませんでしたが、狭間の痕跡と窯脇の通路と思われる硬化面が検出されました。ここは窯の脇にある通路であった可能性があり、そういった意味では側壁の位置は推定できます。



2-2

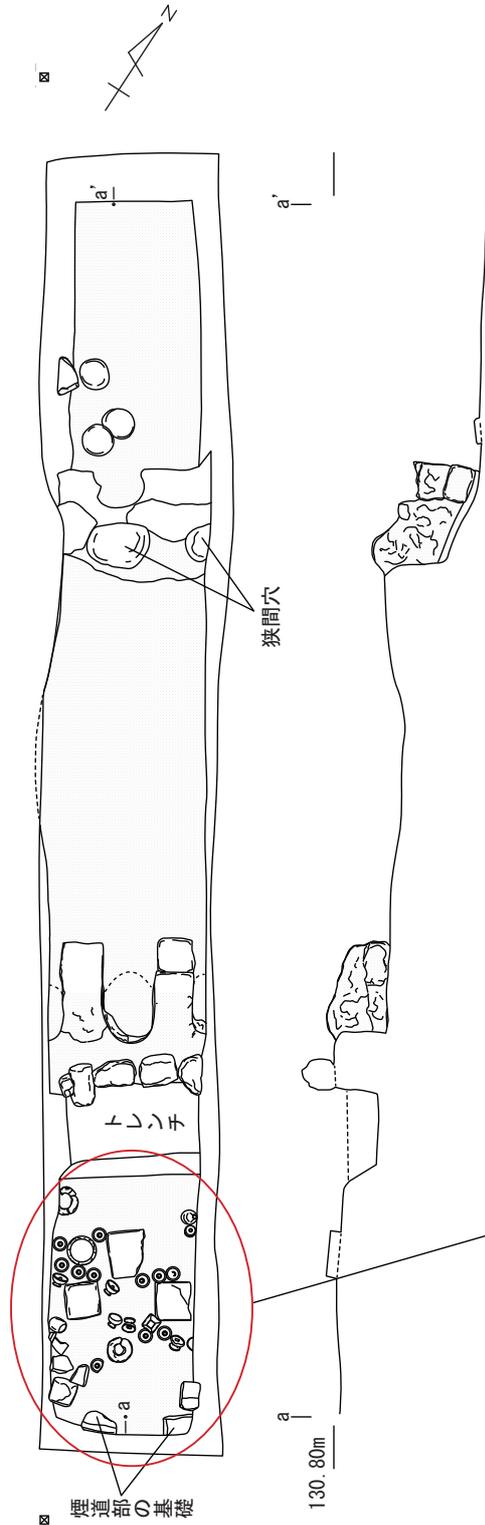
3 トレンチ

窯の胴木間、すなわち焚口を特定するために設定した調査区です。結果的に焚口ではなく、連房式登窯の焼成室が2段に分かれて検出されましたが、下段（下図左側）の焼成室には窯材を積み上げて壁が設けてありました。この壁から上の焼成室へは炎が通ることができない構造となっていることから、ある時期に元々あった巨大な連房式登窯を改造して、この部分を窯体の最後部、すなわちコクド（煙道部）にしたと考えられます。これによって窯の大きさはかなり縮小されたと考えられます（トレンチ配置図参照）。



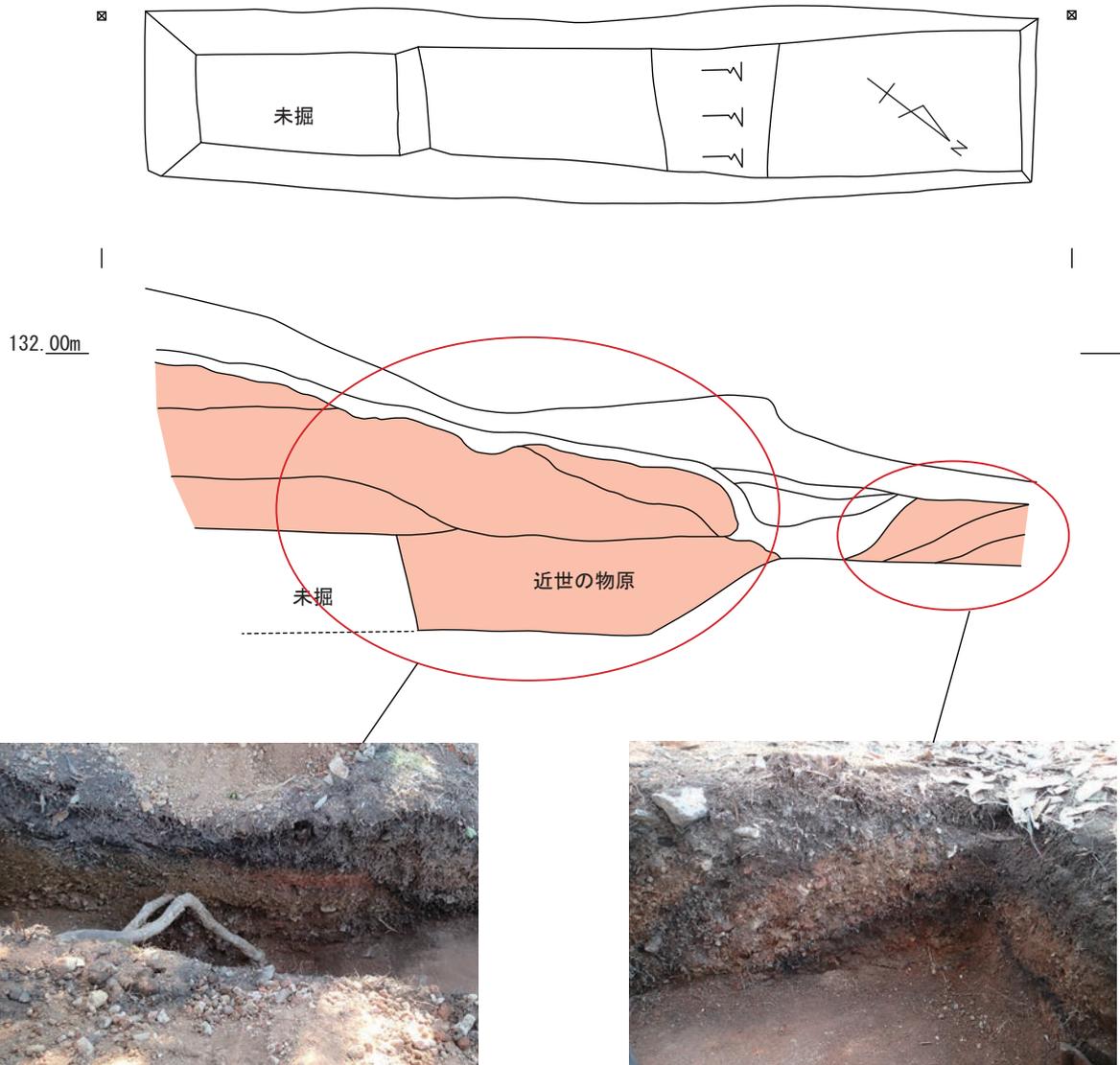
4 トレンチ

窯体縮小前のコクドを確認するために設定したトレンチです。細長く設定した調査区の南端で煙道部の基礎と思われる窯材がみられたことから、ここが窯の最後部であると考えられます。このことは、後で述べる5トレンチの様相からも支持されると考えられます。なお、コクドとなる房の床面には、完全な形の徳利や乗燭（灯明具）が整然と並べてある状況が検出されています。これらは製品として焼成され、そのまま放置されたものなのか、それとも焼成時以外のタイミングで何らかの意味をもってこの場所に置かれたものなのかは明らかではありません。



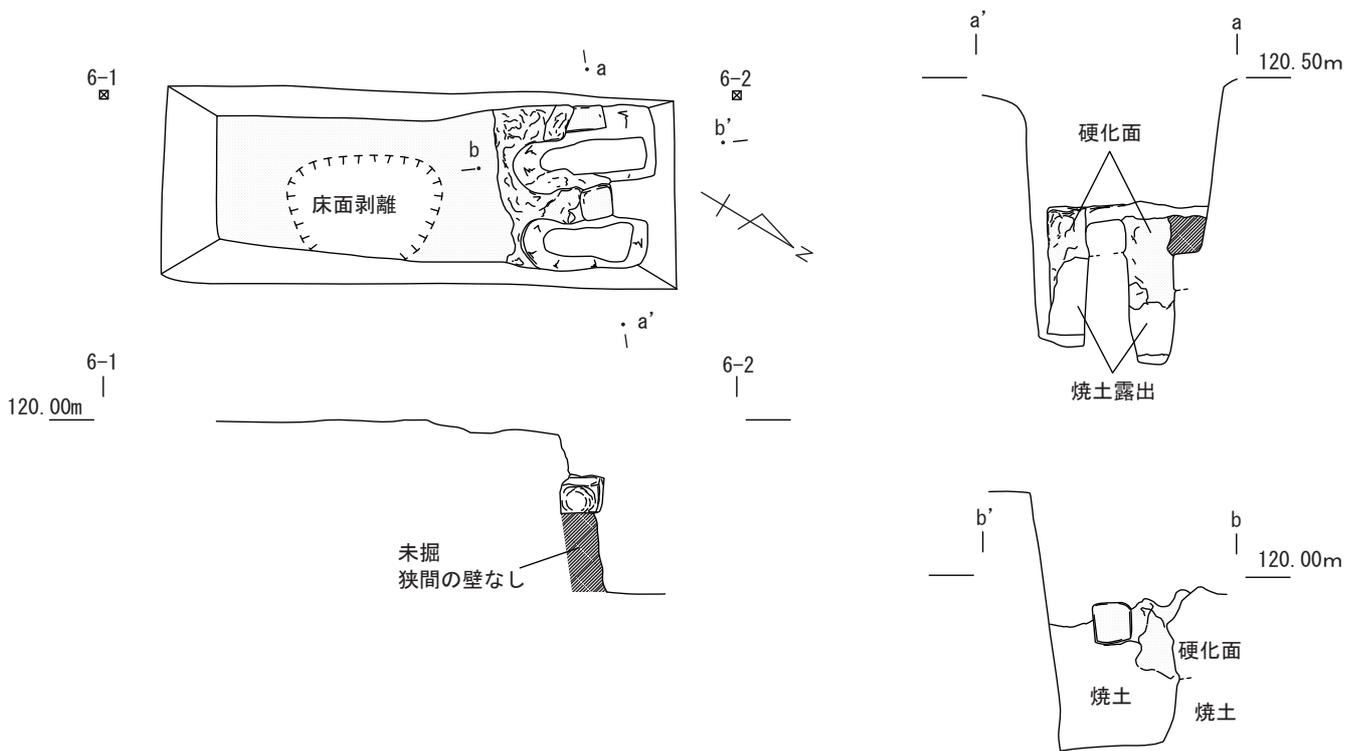
5 トレンチ

コクドのさらに上方の状況を確認するために設定した調査区です。地表面近くでは近代以降に堆積したと考えられる炭層の堆積がみられましたが、その下からは江戸時代の製品がまとまって出土しました。おそらくこの窯の操業に物原（焼成に失敗した製品を捨てる場所）として利用されていたと考えられます。



6 トレンチ

3 トレンチで確認できなかった焚口を確認するために設定しました。結果的に狭間穴とそれを挟んで上下2段の房が確認され、明確な焚口を確認することはできませんでしたが、本調査区の北側は比較的広い平坦面となっており（トレンチ配置図参照）、おそらくこの付近に焚口があったと思われます。



令和2年度調査の成果

さて、ここまで各トレンチの状況を見てきましたが、ここで平成27年度調査の成果と合わせ、今回の調査の最大の目的である窯体の規模についてまとめます。

その成果は次ページの図面に示しましたが、まず、胴木間は6トレンチでみたように、ある程度その位置の推測が可能で、コクド（煙道部）についても4・5トレンチの状況からほぼ図に示した位置になることは間違いありません。その結果、もし、胴木間からコクドまで、一連の窯体であったと仮定したならその全長は約45mとなります。

また、最大幅も明らかになりました。今回の1トレンチと平成27年度調査の4試掘坑で、東西両方の側壁の位置が確認、もしくは推定され、その結果最大幅（十二の間）は約11mとなります。もちろん、これは全長同様、確認された側壁が一連の窯体であることが前提となります。

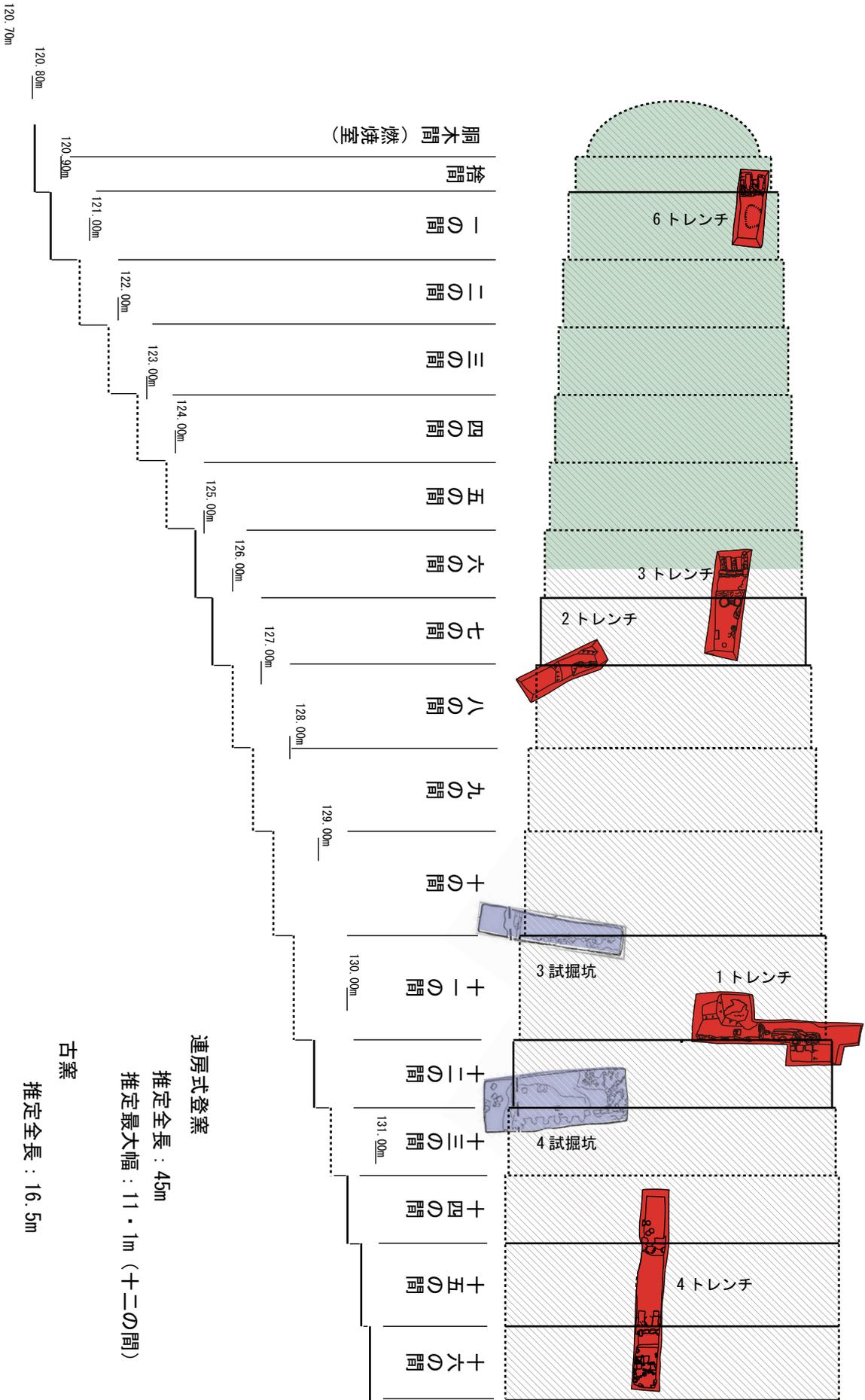
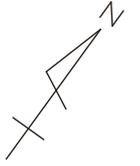
次に、焼成室の奥行について確認しておきま

す。今回の調査では2トレンチと3トレンチ（七の間）、及び4試掘坑と1トレンチ（十二の間）の結果から焼成室の奥行の推定が可能で、さらに4トレンチで一つの焼成室（十五の間）の奥行が確認明らかになりました。

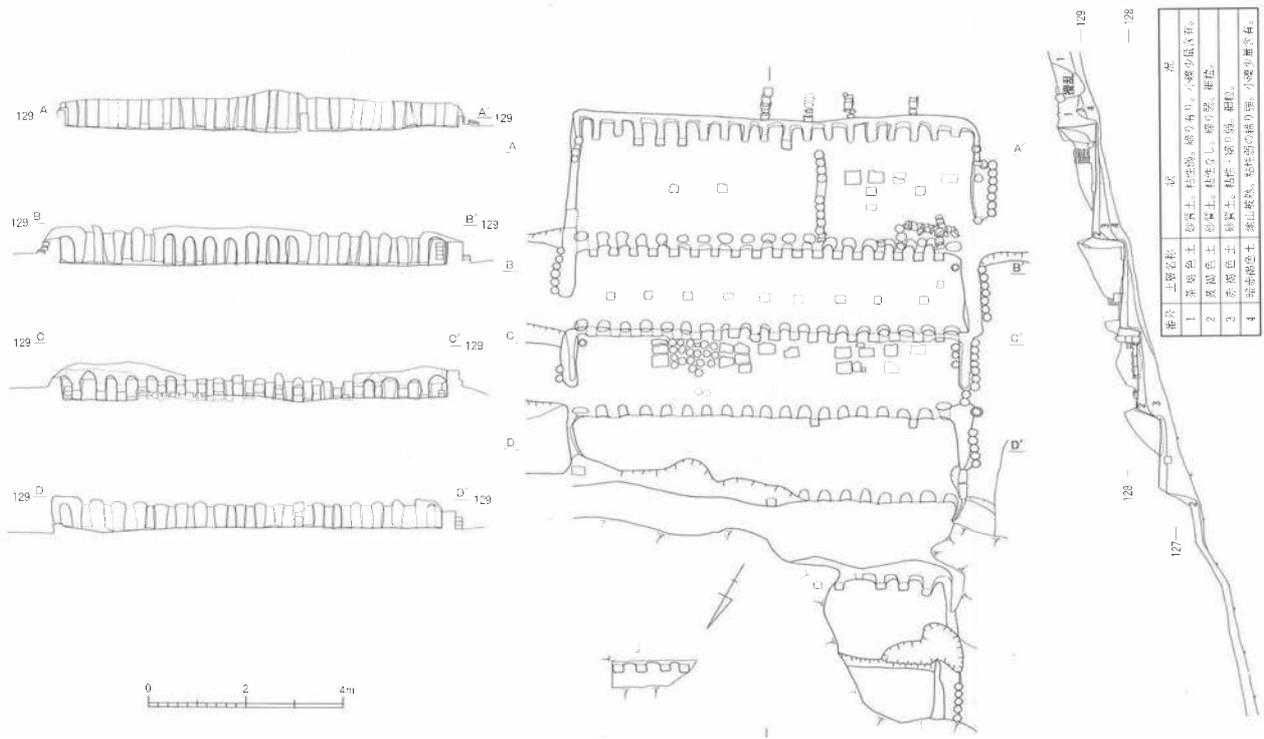
それぞれの数値は、七の間と十二の間が約2.4mと推定され、十五の間は約2.9mであったことが明らかになっています。

では、本窯はいくつの焼成室が連なっていたのでしょうか。今述べたように、焼成室の奥行は必ずしも均一ではなく、場所によって差がみられる場合がありますし、ある程度まとまりがみられる場合もあります。よって、現段階で未調査部分の焼成室の奥行はあくまでも推定となりますが、結果としては製品を置かないとされる捨間（すてま）を除き、16の焼成室が連なっていたと推定できます。

これで、今回の調査の目的はある程度達することできたと言えますが、一方でまだ課題が残されているともいえるでしょう。



桂藏窯跡模式図 (1 : 200)



勇右衛門窯跡 窯体構造図



勇右衛門窯跡全景

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>

